

第3章「貨銀と通貨」 第4章「供給と需要」

司会：第一インターナショナル中央委員会の討論二日目に、ウェストンは、これまでの主張を新たなものに装い直します。この第3章と第4章のレポートを担当されたのは高知県協報話友の会の池内康宏さんです。それぞれの章をレポートしたのちに討論を行います。それではよろしくお願ひします。

第3章 「貨銀と通貨」

ウェストンの新たな主張

ウェストンは、これまでの考え方を別の言い方で、次のように主張しまし

た。「貨幣賃金の一般的騰貴の結果として、同じ賃金を支払うためにより多くの通貨が必要になるが、通貨の分量が固定しているのにどうやって支払うことができるのか。貨幣が足りなくなる。」と。

銀行制度の発達

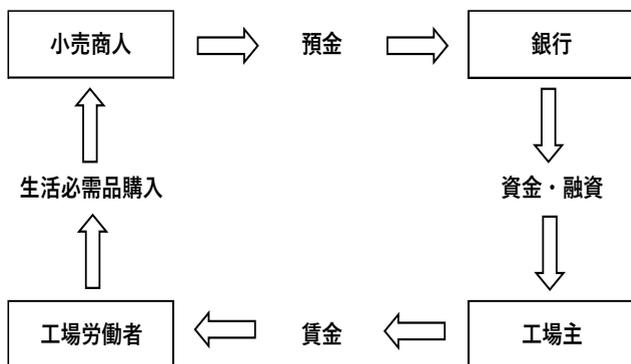
それに対してマルクスはこう反論しました。「イギリス、特にスコットランドは銀行制度の拡張と集中のおかげで同一分量の価値を流通させるためにはるかに少ない通貨で事足りている。現にイギリス労働者階級の年間所得で

ある2億5千万ポンドが約3百万ポンドで流通している。銀貨についていえば、労働者は毎週賃金を小売商人に支払い、小売商人はこれを毎週銀行に送り、銀行はこれを毎週工場主に返し、工場主はこれを再び自分の労働者に支払うという循環が出来上がっている。

循環の仕組みが出来上がっていない国や地方でははるかに多額の通貨が必要とされるが、我々の賃上げとは全く無関係な技術的な問題である。」と。

イギリスの通貨は2部門に大別されます。商人同士の取引や大口支払いは種々の種類の銀行券（紙幣）で行い、小売売買は金属通貨（補助貨幣）です。

◆特集 みんなの学習講座



ウェストンのいう賃金の一般的騰貴

統計を活用して現実をつかむ

この2種類が相互にかみ合っているのです。

が必要品価格の大きな騰貴を引き起こすならば、賃金の一般的下落は同じ規模で必需品価格の下落を生ずるに違いありません。しかし、実際はどうだったでしょうか。1858年から1860年の好景気の際に、賃金はかつてない高さでした。その時、小麦の価格は年平均クォーター当たり約47シリングでしたが、1861年から1863年のアメリカの恐慌により賃金が約四分の一と大幅に下落しました。賃金が下がったのですから、ウェストンの主張では小麦の価格は下落するはずですが、小麦は55シリングに騰貴しました。また通貨量も好景気の際に約337万ポンドだったものが、大幅な賃下げ後には約867万ポンドとむしろ増加したのです。

諸商品の価値だけでなく貨幣取引一般の価値も恐ろしく増加しているのに、通貨は累減する傾向にあり、ウェストンの立場では解けない謎になります。

この動きを洞察したら、通貨の量が固定しているという彼の意見は、とんでもない間違いであると気づいたことになるでしょう。

ウェストンの主張のおさらい

司会：それではレポーター、第3章を簡潔に説明お願いできますか。

池内：前提としてウェストンは賃上げに反対です。第1章から第2章で、労働者が賃上げをしたとしても、総生産物が固定しているのです、物価が上がるだけで無意味であると主張していました。ここでは、労働者の賃上げにより、一定であるはずの貨幣の量をどう行き渡らせられるのか、支払うことができなくなるぞ、ということを行っています。これに対しマルクスは、通貨の絶対量を増やさなくても、流通の現実を見れば銀行制度の発達等により賃上げは可能であると説明しました。

◆みんなの学習講座

司会：現実を洞察すれば、ウエストンの言っていることが誤りであると分かるだろうということですね。

貨幣の量を増やさなくても

買上げは可能

HG：「賃金を上げることによって、より多くの通貨が必要になるだろう。通貨量は固定しているのにそれをどう支払うのか。」とウエストンは言いました。それを現実と突き合わせて反論していくわけですが、もう少し具体的に、貨幣の量を増やさなくても買上げが可能であるという理由を説明してください。

貨幣量が少なくなるからくり

NY：関連の質問ですが、労働者階級の年所得が2億5千万ポンドであるのに、その膨大な額が3百万ポンドによって流通されていると書かれています。よく理解できません。

池内：紙幣や貨幣に限らず、毎回新たに発行して支払っているわけではありませんよね。既に流通している紙幣や貨幣の大半を、銀行等を介してそのまま循環して流通させているのです。また全ての労働者に年間の所得分の賃金がまとめて支払われるわけではないので、貨幣量を増やさなくても事足りるということですね。

AD：限られた量の貨幣を回しながらやりくりしているということでしょうか。

司会：その通りです。今現在の話となりますが、賃金も口座振込が主流となつて、流通する貨幣も昔より少なくな

っているのではないのでしょうか。

HG：電子マネーによる決済も増えつつありますね。

須藤：銀行制度の発達ということですが、支払いに小切手や手形を利用するようになったということです。元々は売買の際に金かでやり取りしていました。しかし金は使用していると摩擦するのので、次第に紙にメモ書きをしながら、みんなが酒場に持ち寄つて相殺するなどでやり繰りするようになりました。やがてそれが一般的になると、手形を作つてそれをみんなが利用できるような交換所のような場所をつくり出します。個人では少額ですが、会社になると多額になり、金での交換が大変になるので、お金に代わる手形を用いて売買ができるようになる。これが銀行制度の発達の一要素です。

柳本：例えばAさんがBさんから物を買いたい、現金がすぐに用意できないため手形を発行し、1カ月後に現金を支払

◆特集 みんなの学習講座

うと約束しました。その1カ月の間にBさんはCさんから物を買いました。今すぐ現金がないので、BさんはAさんからもらった手形を用いて購入し、手形をCさんに渡しました。そしてCさんはDさんから物を買って・・・というように手形を用いてさまざまな売買ができ、最終的に手形交換所に集められて、その差額分だけが銀行に支払われるということで、これだけ大きくお金が動いていても、現金はこの差額部分だけしか必要がないわけです。これら信用を担保として現金を用いずに、手形という紙を用いてさまざまな取引が行われるというのが、銀行制度の発展により生まれてきたのです。

金貨と銀行券（紙幣）

NY・・「明日にでも4ポンド券・・・流れ込むであろう」という部分がよくわかりません。

池内・・要するに小口支払い用に金貨を使っているの、金貨の代わりに裏付けのある紙幣ができたらそれでも事足りるということですよ。

NY・・4ポンド券とか3ポンド券というの。

池内・・それは例えです。1ポンドでも良いし、極端にいうなら3・5ポンドでも良いということです。それができたら金貨が必要なくなるということです。

HG・・大口のお金を金貨や銀貨で取り扱うと多く必要になるので、そこは銀行券で処理をする。小口については金貨・銀貨で処理をしているが、小口でもそれが銀行券でできるなら、そちらに代わっていくだろうという例えですね。

司会・・銀行制度の発達といういわばお金の回り方です。手形等を用いることでより効率的に、かつ実際の貨幣を少なくできる。ウエストンの言う賃上げ

によって労働者に支払う通貨がより多く必要となるというのは間違いであるということですよ。

恐慌の原因

ON・・アメリカの恐慌がやってきて・・・と書かれていますが、このことを教えていただけますか。

須藤・・簡単に解説すると1857年から1858年には恐慌が起きます。これはアメリカの開拓による鉄道建設によるものです。鉄道は莫大な投資が必要になりますが、実際に列車が走るようになり、収益化するまでには多くの年月を要します。そのことによる恐慌です。そして、1861年から1865年は南北戦争です。これによりアメリカからの綿花の供給が途絶えてヨーロッパで大きな影響を及ぼします。1860年ごろにはすごく景気が良かったといわれていますが、すぐに南北戦

◆みんなの学習講座

争が起こり、インドからの綿花の供給がその間行われるようになりますが、戦争が終わり、大量に生産されたインドの綿花が暴落し、再び1866年に恐慌が起こったのです。こういった歴史的な事実があり、この数年の間に大きな変動が起こったということです。

「貨幣の流通量の法則」

須藤…商品の価格総和を貨幣の流通速度で割ると流通手段として必要な貨幣の量が出てきます。第3章最後に出てくる「通貨の法則」というのはこれのことです。商品は買う（消費する）ために売る、これが流通です。最初に投入したお金は本人からだんだん遠ざかっていきます。商品はそれぞれ消費していきますが、流通するお金はそのまま動いていきます。その速度が速ければ速いほど必要なお金は少量で良くなるのです。これは『資本論』の第1巻

第3章第2節に「貨幣の流通」として書かれています。

司会…ありがとうございます。第3章はここまでとして第4章に移りましょう。

第4章 「供給と需要」

賃金の高低の基準は何か

ウェストンは賃金の引き上げ、つまり高い賃金に反対しますが、そもそも高い賃金とは何なのでしょう。何を基準に高い低いが決まるのでしょうか。当然20シリングは5シリングよりも高いし、200シリングは20シリングよりも高いのですが、どうして高いかという基準がなければ意味があるものではないですね。しかし彼にはそんな基準は関係ないので、「なぜ一定額の貨幣が一定量の労働に支払われるのか」は説明できないし、その必要があ

るとも思っていないはずですよ。

もし彼がその問いに「それは需要と供給の法則により決定される」と答えるとしても、ではその「需要と供給はどのような法則によつて規制されるのか」と問い直さねばならないでしょう。労働の供給と需要との関係は絶えず変動しています。そのため労働の市場価格も絶えず変動します。確かに需要と供給は市場価格の一次的な動揺を規制しますが、各商品の「価値」そのものを説明できるものではありません。それが均衡すれば、一商品の市場価格はその現実価値と、すなわちその市場価格の同様の中心をなす標準価格と一致するのです。ですから、私たちはこの価値の本性を研究するにあたっては、市場価格に及ぼす需要と供給の一次的影響は、全く何の用もないということなのです。

◆特集 みんなの学習講座

需要・供給で価値の

説明はできない

司会…では最初にレポーターからこの第4章の概要の説明をお願いします。

池内…何度でも言いますが、ウェストンは賃金の高騰に反対しています。でも高い低いはどうやって決まるのかといえは答えられません。また、なぜ一定額の貨幣が一定量の労働に支払われるかの問いに対しては、需要と供給の法則により決定されると返答するでしょうが、その法則の本身は答えられないでしょう。単に労働者や労働組合のたたかいを否定することに様々な理屈づけをして繰り返すだけであると思えます。

柳本…端的に言うと、ここでは価値の存在を示唆しているということです。需要と供給により価格は上がった下がったりするが、何を基準としているのかそれだけでは説明がつかない。そ

の基準となる何かがある。それがすなわち価値なのだということです。

TU…第4章前半部分は、基準点が何なのかを明らかにしようということですね。それがないと高い低いという判断は、単に主観的なものになるということですね。需要と供給の法則で決まることとして、それだけでは間違いである

と後半部分で述べていきますね。
司会…それが価値とは何かにつながっていきますね。

相対的過剰人口

須藤…本文には書かれてはいませんが、ここでは相対的過剰人口の問題も示唆しています。『資本論』第23章第4節では「相対的過剰人口の種々の存在形態」として、常に三つの形態、流動的、潜在的、および停滞的形態を指摘しています。流動的というのは、子どもの頃から働かされ、成人になったら残る

者は極めて少数で、大半は解雇されません。潜在的とは、農村人口の一部は、

たえず都市プロレタリアートとして、必要に応じて働きに出て、必要なくなれば農家に戻るといふ貧窮の泥沼状態のもので、停滞的というのは、現役労働者軍の一部として働いているが、長時間労働で低賃金におかれてそれだけでは生きていけない。いわば失業状態と変わりがなくという、現在の非正規労働者のような状態におかれることと、より労働者の賃金は低くおさえられていくということです。需要と供給により市場価格は上がった下がったりします。どこを基準としているのか。基準は何か。それが価値だといふ章では示唆しています。

司会…ありがとうございました。次号の第5章でウェストンへの反論は終わり、第6章からはマルクスの理論の真髓に入っていくこととなります。